村上忠順翁顕彰会報

鮎滝　ふるさとのおやのみために便あらばおくらまほしき鱒とわか香魚

目　　次

- あいさつ…… 2
- 総会次第…… 3
- 特集・三山日記…… 4
- 琵琶歌紹介…… 6
- 事業報告・決算報告(平成元年度)…… 7
- 事業計画予算(平成２年度)…… 8

表紙写真――忠順集(紀行編)
三山日記「鮎滝」

村上忠順翁顕彰会報
第　２　号
編集　村上忠順翁顕彰会
事　務　局
発行　平成２年５月20日

平成二年度

定例総会によせて

豊田市長　加藤　正一

平成二年度を迎え、村上忠順翁顕彰会の皆さんに謹しんでごあいさつを申し上げます。

激動の昭和が終焉を遂げ「平成」の時代を迎えた元年に設立された貴顕彰会は歴史の上からも大変意義深く因縁浅からぬものがあり、本市の歴史や文化の高揚に大きく寄与されることが期待されるところであります。

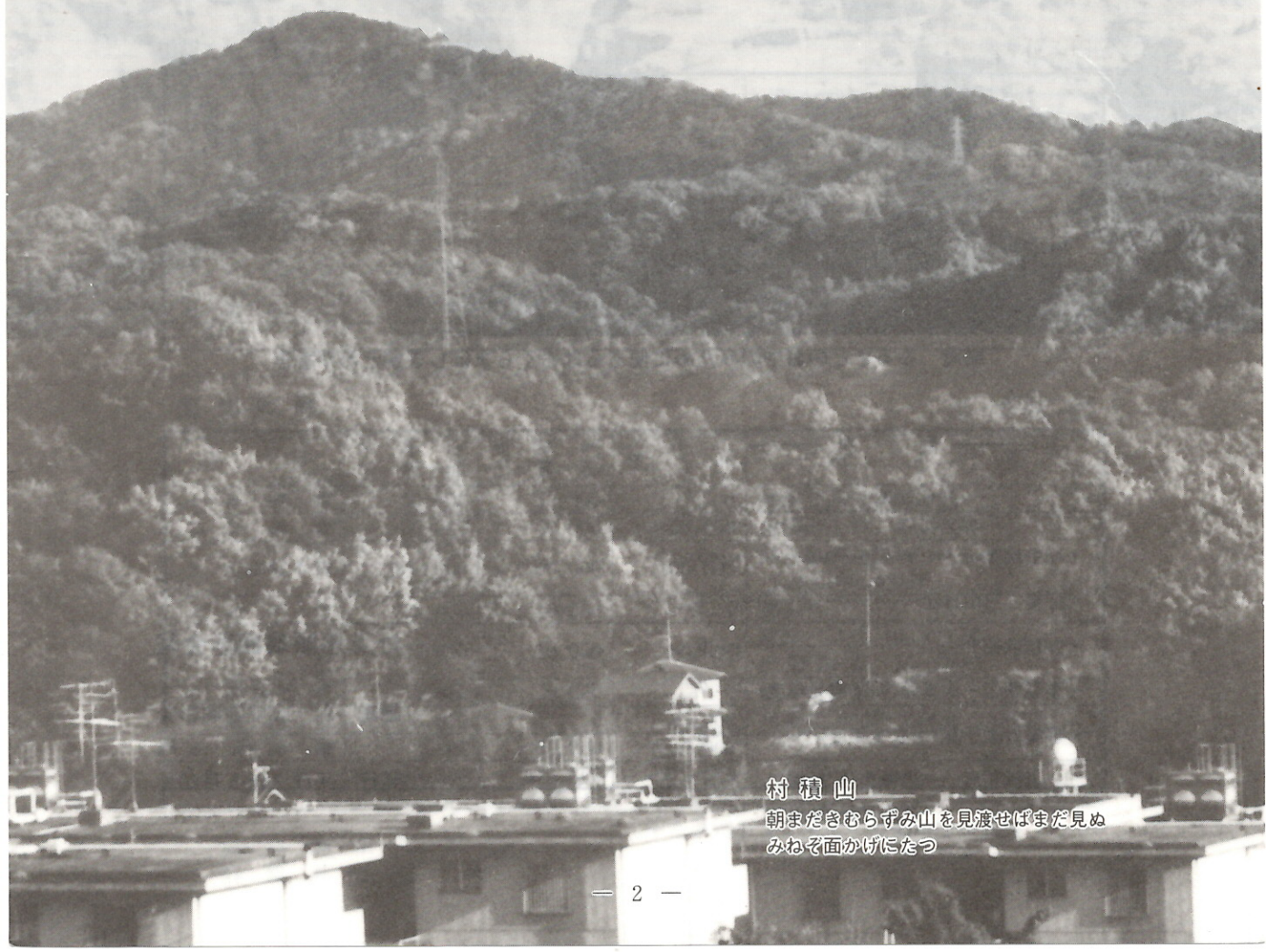
成熟社会を向え心に文化を求め、いよいよ発展する本市は安定した経済に支えられ順調な市政を推進いたしております。これは貴会の会員を始め市民のご理解の賜と喪心より感謝を申し上げます。

さて本市には貴会を始め四つの顕彰会が設立され、それぞれ特色のある活動を展開しておられます。

先人を顕彰し、その足跡をたづね偉業に学びそして、これが後世に伝えられていくことは喜びに堪えません。

貴会は、発足早々にして村上忠順集（紀行編）を復刊され、この中から「三山日記」をとりあげその紀行をたづねてバス研修を行い折々の短歌を通じ忠順翁を心の面から理解を深めその人となりを研賛されましたことに深く敬意を表します。忠順翁の偉大な業績は今後においても調査研究が望まれるところであります。

貴顕彰会の益々のご活躍を期待するとともに文化の香るふるさとの創造に大きく貢献されますようお願いし会員各位のご健祥を祈念申し上げご挨拶といたします。



村積山
朝まだきむらずみ山を見渡せばまだ見ぬ
みねぞ面かげにたつ

平成二年度 村上忠順翁顕彰会総会

日　時　平成二年五月二十日(日) 午前十時

場　所　六鹿会館　第一会議室

式　次　第

一、開会のことば

二、会長あいさつ

三、議　　事

第一号議案　平成元年度　事業報告について

第二号議案　平成元年度　会計決算報告について

第三号議案　平成二年度　事業計画について

第四号議案　平成二年度　収支予算について

四、来賓祝辞

五、閉会のことば

創作琵琶発表

題名　「幕末に活躍した勤皇の国学者　村上忠順」

作詩作曲　吉田旭蓮

記念講演

題名　「忠順と村上文庫」

講師　刈谷市立中央図書館司書

特集　三山日記

一、随筆　三山日記の足跡を　たどる研修旅行

前田　修三

道路は人と人が行き交う手段だから人の少ないところがより狭く不便になるのは致し方ない。

鳳来寺山から佐久間経由で秋葉山へ走る道は大型バスには難儀な道だった。村上忠順の辿った三河大野から遠江戸倉までは先遣隊の調査によって通行不能と判明したため割愛せざるを得なかった。にもかかわらずである、道程三三〇キロメートル、所要時間一〇時間四〇分。一五〇年前忠順はこれを五泊六日の旅とした。

六月二九日、快晴。前日の豪雨が幸いした、気温が上って霞がかりとなったものの大気は雨に洗われていて遠望もかなり利いた。宮路山は御油、赤坂からすれば夏の月ほど間近であった。

鳳来寺山のパークウェイは、前日は通行止め、二八日なら参詣できなかったのだった。秋葉山には涼風が吹き渡り、急坂に躍った鼓動をさわやかに押えてくれた、天候は我に味方した。

三山の開基、縁起は、宮路山は大宝二年（七〇二）持統天皇行宮。

鳳来寺は大宝三年（七〇三）。秋葉神社は神亀元年（七二四）。砥鹿神社は大宝元年（七〇一）と白鳳期から奈良前期に集中している。

この時代は政治制度（律令）文化（記・紀の編さん、仏教美術、建築万葉歌人の輩出）に清新な力強い創造をした時代である。

国学者忠順の巡行は蓋し当然と言うべきか。

道中の地理案内は神谷初之さん、中川吉一先生の万葉和歌解説もあり田中伸一さん編さんによる「研修のしおり」を伴侶に、石川隆之会長をはじめ元気に旅程を終えた。

秋葉神社

二、三山日記（天保十年己亥卯月）

三山とは、宮路、鳳来寺、秋葉の三山である。

天保十年己亥は、西暦一八三九年江戸後期にあたり、およそ今から一五〇年前となる。

卯月、卯は十二支の第四、これを月に当て四月となる。（旧暦）

忠順ときに二八才。

日程

四月　八日　旅立
四月　八日　豊川泊
四月　九日　大野泊
四月　十日　戸倉泊
四月十一日　芝本泊
四月十二日　白須賀泊
四月十三日　帰郷

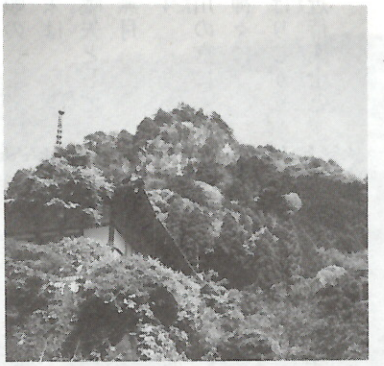
三、詩でたどる三山紀行

・古郷の垣のうの花こころあらば
　わがかへるさを待つけてちれ
・時鳥もし来てなかば木がくれに
　とどめおかなむかきのうの花
・朝まだきむらずみ山を見渡せば
　まだ見ぬみねぞ面かげにたつ
・かは桜咲のこるやとあづさ弓
　矢はぎの里にいるよりぞとう
・梓弓矢作のはしはけた朽て
　ふねよりわたる広き川せを
・流往水よりふかくもの思へば
　世にうき事はおほひらの川
・来かかりてみれば卯月の初にも
　さくやなにおふ藤河の里
・霍公鳥尋ねむかたもおもほえず
　たつきもしらぬ山中の里
・宮路山いづこならむ郭公木
　高くなきてわれにかたらへ
・産屋たて水そそぐなり天地に
　ただわれのみといひし仏に
・けからひはとはずときく仏すら
　みそぎするなり夏のはじめに
・今ぞしる出てうまるる寺の名は
　ただけふの日にあへるためとか
・あづまてる神のみおやのすずり水
　いく千代へても濁らざりけり
・万世をさかえむ事は東てる神の
　めでけむ松にこそしれ
・右ひだりつつじ花さく是やこの
　里の名におふ赤さかの山

宮路山

・かきかぞふふた見の道のふた度も
　又こむ事はいのちなりけり
・深くいのるわをちはひませ豊川の
　なみなみならぬおそきさかゆゑ
・敷しまの道とくすしのわざをおき
　てなにをいのらむとよ川の神
・古へにうゑし柳の跡もなし
　しげりにしげる草のみにして
・むかしへや殖し柳のおもかげを
　なびくに見する野べの小薄
・いづかたかふじの高ねはしら雲に
　見えもわかれず布尽の高峯は
・見なほさねききなほさねど祈る也
　とがある身をもとがのやしろに
・滝川の波の白ゆふ見れどあかず
　常にもがもなここにありへて
・家づとにせまくほしけどすべもな
　しこの滝川の白ゆふ花を
・衣手につつまむものをたき川の
　しらゆふ花をみぬ人のため
・わがのれる馬ぞつまづく滝川の
　岩かどおほみうまぞつまづく
・のるこまのつまづくからにふるさ
　とのいもやこふると人のみるらむ
・いとまあらば早せのわかゆつらま
　しをけふしも駒にのりつつもとな
・のるこまはおそくゆかなん滝川の
　岩まさばしるあゆ子ともしも
・若鮎つる処女もあらばおりたちて
　たはれむものを旅にはありとも

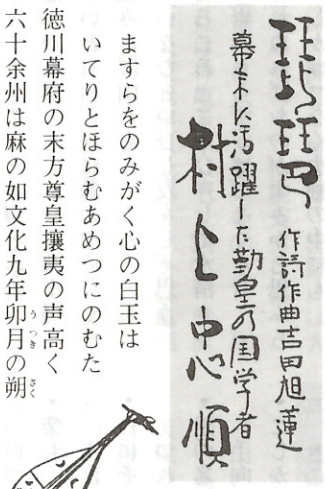
・滝河のせにふす年魚のいをとると
　木こるいとまにつりするやたれ
・ふるさとのおやのみために便りあ
　らばおくらまほしき鱒とわか香魚
・かいもなくさををもとらず帆もは
　らでつなとりかけてわたす川舟
・ともすれば時鳥かとたどられき
　あらぬ千鳥のおときく毎に
・をちこちになく鶯のこゑす也
　さきおくれたる花やあるらむ
・卯花の雪にこもりてうぐひすの
　たにの戸さらず今もなくらむ
・岩の上にたつはけぶりかしら
　雲かみぬもろこしのとり来る寺
・世にまさばあともはましを此山を
　見がほりましおばのみことを
・百づたふゆついはむらの常滑に
　いたじき川はかしこかりけり
・おもちちはいかにますやと思ひね
　の夢にぞ見つる古さとの空
・三河路と遠つ淡江の界てふさかひ
　たふげをこえぞわづらふ
・山ふかみ夏ともいさやしらま弓
　いとものどかに鶯のなく
・山みれば山おもしろみもろともに
　いなむといひし友をしぞ思う
・ころころところび声して水清き
　岩本さらずかはづなくなり
・なれぬればおのがすみかと思ふら
　しかはづなく也袖の中にも


鳳来寺山

・さゐ川の波立わたりあきは山
　あきにはあらねど木葉ちりくる
・さゐ川をわたりなくらむ時鳥
　柳が窓をあけがたの空
・かぐつちの神のあらびのもしあら
　ばちはひたまはねこれの大神
・けた川のけたより行むよしをなみ
　遠近人の舟よばふなり
・いかにやととふ人だにも夏草の
　しげる道にまどひぬるかな
・草しげみ道も中瀬にわれは来ぬ
　いづこなるらむ柴本の里
・柴もとのしばしばくべき里ならず
　あはれくるしも道まどひして
・日にそへてしげる若葉に浜松の
　つれなき色もわかれざりけり
・里の名の浜まつが枝の手むけ草
　手向てゆかむちもりの神に
・こしかたも今ゆくさきも常盤にて
　とこにもがもな浜まつのさと

・いにしへの学の友をえもとはで
　心ひくまのはままつのさと
・意吉麻呂がいりみだりてし榛もあ
　らばわか衣手をにほはさましを
・舞坂ゆ吾漕いでぬ浜名の海
　舟はつるまで波たつなゆめ
・えもとはず身をつくしてもみるべ
　きを引佐細江の心ぼそさに
・古への遠つあふみは跡もなし
　世はいとからき汐海にして
・名のみなる遠つあはうみいまぎれ
　の今はこひしきとほつ淡うみ
・からき世をしらずや有らむあはう
　みにあらぬ浜名の浦のふな人
・浜名の海松原づたひこぎためば
　見せまくほしき妹をしぞ思ふ
・わた中に立たる松の一むらに
　よせくる波の音のともしさ
・浜名の海おきつ白波花ならば
　つとにせましを沖つ白波
・かあをなる奥津藻とると蜑の子が
　小舟漕ぐなりわがのるあたり
・波のむたなびく玉もを衾にもくぐ
　つ持出てかるはたが子ぞ
・庭をよみあまのつり舟もかり舟
　浜名のおきに乱れつるみゆ
・荒井てふ名にこそおへれしら波の
　いともしづけきこれの浜びか
・古郷をへだつともひし関こえて
　三河路近くなるぞうれしき

・たえにきと聞わたりしぞまことなる浜名のはしの跡のまつ風
・松風の吹わたるこそあはれなれはま名の橋の昔おぼえて
・波の音もミねの嵐も高し山やまずふくなり浦の松原
・けしきよき高石の山のたかだかに妹をぞおもふ道ハとほけど
・是やこの音に高師の山ならむのミねのあらしの風とよむなり
・しほ見ざかしほこそミゆれわがこふるふじの高ねハ雲がくれつつ
・さりともと思ひしものをしほ見坂けふだに見えず不尽の高ねは
・たはれめはあすの契もしらすかのうまやうまやと人またぐらむ
・をとつ日のその先つ日ぞ思ほゆるけふはたわたる国さかひ川
・三川のやけふ二河をふたりゆけバ吾国ながら心さぶしも
・よし田どハうべもいひけり苗代のなへのみどりの色ぞとなる
・二川のふたたびくべき事もあらじよくミてゆかむよしだうまやを
・昔たれよしとよく見て吉田とは名づけそめけむこれのうまやど
・すみかにや飛ていにけむこれも又もとにかへるのたぐひなりとて
・古郷の垣のうの花いたづらに雪ときえにきかへるさまたで　（完）



ますらをのみがく心の白玉は
いてりとほらむあめつにのむた

徳川幕府の末方尊皇攘夷の声高く
六十余州は麻の如文化九年卯月の朔
村上蓬盧忠順は三河の国堤村に生誕し
家代々の医業を継ぎ刈谷の藩主土井候の
待医の要職給りしが国学に打ち込みて
文人歌人の名も高しされど国学者の常として
尊皇思想を持論とし勤皇論を説きけるが
刈谷藩の意にそはず同志松本奎堂宍戸彌四郎は
天子の国を恣意支配する徳川幕府を倒さんと
天誅組を結成し大和十津川に兵を挙げ
束ねし力振りしぼり縦横無尽に荒れまはる
武力の限り戦ひしが次第次第に攻め立てられ
宍戸討死松本も腹かき切ってぞ果にける
残る同志のある者は幕吏を逃れ忠順の
もとに潜みし者もあり天誅組の終末は
悲劇の中に消えしかど討幕挙兵の嚆矢として
後の世までも賛えらる慶応三年神無月
遂に幕府は朝廷に大政奉還を上表す
王政復古の令により征東総督有栖川の宮に
召し出されて忠順は伊勢や熱田の神々に
戦勝祈願を起草せり討幕軍にも加はりしが
上野の戦のその後は故郷に帰えり近待衛士と
してひたすら国事に奔走す

ことしあらば我が身一つは君のため
火にも水にも入らむとぞ思ふ

歌を友とし医を究め一世に輝く国学者
七十三才を一期としその生涯を閉じにけり
今も尚特別展を催して偉業を讃え偲ぶなり
偉業を讃え偲ぶなり　完

表紙のことば

鮎滝の名は、この滝を飛躍し溯上する鮎を二間余の竿先につけた笠網を持って厳頭に待ちうけ鮎が跳んだところを掬い捕るところから生れた。（新城市出沢鮎滝保存会）

編集後記

人には、さまざまな生き方があって、それぞれの人生をたどる。そしてさまざまな旅がある。

昔、社寺に詣でた旅の話しはよく聞いた、その名残りは路辺の石仏に刻まれた標にうかがうことができる。

忠順の旅、三山紀行は日記が保存されていて、今その足跡をたどることが出来る。一五〇年前の地名やその土地の風習まで記され感心さやられることが多い。

今回の会報は設立初年度事業にとりあげた三山日記を思い出に改めて特集として道々の短歌八十余首を掲載した、再読され旅情をかみしめ詩から多くを学びとって頂ければこの上もない幸せである。

平成二年度は牛のような歩みで弛むことなく前進したいと願い皆さんのご支援を乞うものである。

平成元年度村上忠順翁顕彰会事業報告書(案)

(昭和63年1月～平成2年3月)

月	事業名	説明
1	設立総会 記念講演	22日　六鹿会館 22日　講師　簗瀬一雄先生
4	研修(バス見学旅行) コース事前調査	23日　忠順集(紀行編)三山日記全コースの下見
5	役員会	「村上忠順集(紀行編)」復刊の打合
6	役員会 顕彰会報発行 村上忠順集(紀行編)復刊 研修バス旅行	顕彰会だより発行打合せ 5日　第1号を発行 14日～18日　各会員へ発送 29日　バス日帰り忠順集紀行編「三山日記の足跡をたずねて」
11	役員会	運営、行事について協議
3	顕彰会報編さん 役員会	第2号発刊について協議 定例総会の準備について

平成元年度村上忠順翁顕彰会収支決算書(案)

総収入額	1,322,162円
総支出額	1,301,303円
次年度繰越額	20,859円
借入金未償還額	30,000円

収入の部

単位：円

項目	予算	決算	増減	説明
1. 会費	150,000	430,000	280,000	1,000円×430人
2. 補助金	300,000	300,000	0	豊田市より
3. 寄付金	100	25,000	24,900	3人より
4. 預金利子	100	1,162	1,062	預金利子
5. 負担金	125,000	136,000	11,000	バス研修 4,000円×34人
6. 借入金	0	430,000	430,000	会運営資金借入れ
7. 雑収入	100	0	△ 100	
合計	575,300	1,322,162	746,826	

支出の部

単位：円

項目	予算	決算	増減	説明
1. 報償費	50,000	40,000	△10,000	設立総会記念講演講師謝礼
2. 会議費	80,000	13,960	△66,040	会場使用料、茶菓代
3. 印刷製本費	400,000	616,600	216,600	村上忠順集(紀行編)復刊 総会資料、コピー代 顕彰会だより等
4. 通信費	10,000	5,892	△ 4,108	郵送料
5. 旅費	10,000	185,531	175,531	講師送迎・研修コース下見 研修バス代・通行料等
6. 消耗品費	5,000	34,690	29,690	顕彰会長・会計の印・B紙他
7. 償還金	0	404,630	404,630	元金 400,000円利息 4,630円
8. 予備費	20,300	0	△20,300	
合計	575,300	1,301,303	726,003	

監査の結果適正であることを認めます。
平成2年3月31日

監事　石川光彦 ㊞
同　近藤秀男 ㊞

平成２年度村上忠順翁顕彰会事業計画(案)

月	事業名	説明
5	定例総会	20日　六鹿会館 講演　演題「村上文庫について」 琵琶発表　吉田旭蓮作詩作曲 題「村上忠順」
8	研修会	バスにて村上文庫（刈谷市）・杉本美術館（知多市）および常滑焼見学
9	村上忠順集復刊	前年度につづき第２刊を復刊
1	講演会	演題「忠順と漢方医学」
3	会報発行	
	役員会	随時
	調査研究	〃

平成２年度村上忠順翁顕彰会予算（案）

収入額　890,300円
支出額　890,300円
差引　0円

収入の部

単位：円

項目	本年度予算額	前年度予算額	増減	説明
1．会費	430,000	150,000	280,000	1,000円×430人
2．補助金	300,000	300,000	0	市補助金
3．寄付金	100	100	0	
4．預金利子	100	100	0	預金利子
5．負担金	160,000	125,000	35,000	バス見学個人負担金 4,000円×40人
6．雑収入	100	100	0	
合計	890,300	575,300	315,000	

支出の部

単位：円

項目	本年度予算額	前年度予算額	増減	説明
1．報償費	50,000	50,000	0	講演２回分講師謝礼
2．会議費	20,000	80,000	△60,000	会場借上料、茶菓代等
3．印刷製本費	600,000	400,000	200,000	村上忠順集復刊 1,200円×500冊
4．通信費	10,000	10,000	0	郵送料
5．旅費	170,000	10,000	160,000	研修バス代 160,000円 出張旅費　10,000円
6．消耗品費	5,000	5,000	0	紙・文具等
7．償還金	33,000	0	33,000	元金30,000円　利息 3,000円
8．予備費	2,300	20,300	△18,000	
合計	890,300	575,300	315,000	